立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
個人研究
２０１２年度研究成果報告書

	所属・職名	氏　名
研究代表者	文学部・准教授	小澤　実　印
研究課題	近世ルーン学テクストに関する基礎的研究 オーレ・ヴォームの著作を中心に	
研究期間	２０１２　年度	
研究経費	500000 円	

研究の概要（２００～３００字で記入、図・グラフは使用しないこと）

本研究は、17 世紀にデンマークで成立した未校訂のルーン文字研究テクスト、とりわけコペンハーゲン大学医学部教授オラウス・ウォルミウスによるラテン語テクスト『デンマークの古遺物に関する六書』Danicorum monumentorum libri sex (1643) を用い、第一に当該テクストの校訂を、第二にテクストの構造的分析を、第三にテクストの成立過程と成立の状況の再現を、第四に近世スカンディナヴィアを席巻していたゴート・ルネサンスという思想運動との関係を明らかにすることにより、ウォルミウスのテクストが近世ヨーロッパ世界において持っていた役割と同時代ヨーロッパの思想世界に対する影響を探ることを目的とする。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　ルーン文字　〕〔　オラウス・ウォルミウス　〕〔　ゴート・ルネサンス　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

申請者は、最初にウェブ上の Google books で公開されている『デンマークの古遺物』（1643）の印刷本テクストをダウンロードし、当該テクストのラテン語データの打ち込みを行った。本テクストは、ラテン語でおよそ500頁を超える分量をもち、テクストの要所にルーン石碑を再現した挿絵も挟み込まれていることがわかった。申請者は、テクスト全体ではなく、今回の分析に必要とおもわれたイェリング石碑という成立期のデンマーク王権に関わる特定の石碑に関する分析箇所を選択的にうちこみ、同時にラテン語の翻訳文を作製した。

第二に、第一段階でうちこんだテクストの構造的分析をおこなうために、『デンマークの古遺物』全体の構成を確認した。そのタイトルの通り6つの巻から構成されるこの著作は、第1書がデンマーク古史についての総論にあたり、残りの5巻がデンマーク王国における監督区ごとの具体的な遺物の紹介となっている。第2書ではシェラン島の遺物を合計8節で、第3書はスカンディナヴィア半島南部のスコーネを19節、ハッランドを1節、ブレキンゲを7節、ボルンホルム島を10節にわたって解説している。第4書はフュン島の遺物を6節、ロラン島のそれを4節にわたって紹介する。第5書ではユトランド半島の遺物について、オーフスを7節、オールボーを6節、ヴィボーを10節、リーベを12節、ゴットランド島にいたっては5節をもちいて紹介している。第6書は、1380年以来デンマーク王が王位を兼ねていたノルウェーであり、ベルゲンで8節、オスロで13節、スタヴァンゲルで26節、ニダロスで3節が割り当てられている。申請者は『デンマークの古遺物』全体の情報構造、頁配分、図版情報などをエクセルで表化した。

第三に、テクストの成立過程と成立の状況の再現をおこなうために、研究文献の整理と『デンマークの古遺物』の具体的分析を行った。当該テクストに特化した研究は、19世紀以来ほとんど皆無と言って良いが、著者のウォルミウスはコペンハーゲン大学の医学部教授であったため、医学史的研究ならびにその副産物としての人物史的研究は一定の蓄積がある。さらに『デンマークの古遺物』は、隣国スウェーデンのルーン学者ヨハンネス・ブレウスとのルーン文字の解釈と起源を巡る論争を経る過程において成立したという事情から、申請者は、ウォルミウスが執筆した他のルーン学テクストや書簡をも解読しながら、『デンマークの古遺物』の成立過程などの再現につとめた。とりわけ、ウォルミウスが当時どのような書物を読み、どのような人物と交流していたのかという点に焦点を絞り、彼の情報源を明らかにし、その情報の用い方とウォルミウスの独自性を明確にしようとした。

第四に、『デンマークの古遺物』のテクスト内容と、近世スカンディナヴィアを席巻していたゴート・ルネサンスという思想運動との関係を明らかにした。ゴート・ルネサンスとは、16世紀から17世紀にかけてのスカンディナヴィア、とりわけスウェーデンにおいて展開した、アイデンティティ確立運動である。イタリア・ルネサンスが、自らの文化的起源をギリシア・ローマ人とつなげたのに対して、ゴート・ルネサンスは、自らの起源をゲルマン人の一派であるゴート人にもとめる文化復興運動であった。ゴート人の文字とされたルーン文字は、このようなゴート・ルネサンスの中で中核的な役割を果たしていた、とされる。しかしながら申請者は、『デンマークの古遺物』に見える諸要素は、先述のゴート・ルネサンスの運動に影響を受けつつも、16世紀末にデンマークで再発見されたイェリング石碑によるインパクトが大きな影響を持っていたと推測するにいたった。

研究成果の概要（つづき）

以上の調査を通じて得られた結果を簡潔にまとめておきたい。イタリア・ルネサンスとは対照的なゴート・ルネサンスは、16 世紀のスウェーデンで生まれた。そのなかでもっとも重視されたのがゴート人の文字と考えられたルーン文字であり、ヨハンネス・ブレウスによって研究が端緒についた。他方でスウェーデンの影に隠れるデンマークにおいても、イェリング石碑の再発見によりルーンに対する関心は高まることになった。コペンハーゲン大学の医学教授オラウス・ウォルミウスは、ブレウスらゴート・ルネサンスの成果に恩恵を受けながらも、書物研究、書簡による情報収集、図版の採用、国王による法令の利用による網羅的なデータの収集といった自らが利用可能であった知的システムを駆使し、ルーン研究の手法を確立したという結論を、申請者は引き出すことができた。

※　この（様式２）に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
小澤実「ゴート・ルネサンスとルーン学の成立　デンマークの事例」
ヒロ・ヒライ、小澤実編『中世・ルネサンス精神史研究』（仮）
（中央公論新社　2013年刊行予定）、原稿提出済み

③
小澤実「ゴート・ルネサンスとデンマーク・ルーン学の成立　オラウス・ウォルミウス（1588-1655）の著作を中心に」
シンポジウム『人知の営みを歴史に記す　中世・初期近代のインテレクチュアル・ヒストリーの挑戦』2012年7月6日、立教大学池袋キャンパス太刀川記念館

④
小澤実「二宮隆洋さんのこと」
『史苑』73巻2号（2013年3月）、1-4頁

小澤実「公開シンポジウム「人知の営みを歴史に記す　中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」報告記」
『史苑』73巻2号（2013年3月）、146-160頁